

Topics

アーツカウンシルしずおかがアーティスト向け講演イベント開催 アートの視点から空き家活用と「関係の再編集」の可能性探る

アーティストにリノベーションまちづくりを知ってもらおうと、アーツカウンシルしずおかが浜松市内で講演イベントを開催し、約40人が参加しました。

講師にはメンター派遣制度を活用して柳本茉希氏（浜松市）が招かれました。



柳本氏は講演の中で、空き家を単なる活用対象の建物として捉えるのではなく、地域の人や活動、記憶、既存の資源との関係性の中で「場」を育てていく視点の重要性を強調。「リノベーションまちづくりは建物を直すだけでなく、地域にすでにある人・建物・仕事・文化等を資源として捉え直すことでまちの価値を高める」と説明しました。

また、実践へのステップとして「いきなり空き家を探すことから始めないこと」とした上で、まずはまちを歩き、人と話し、地域との関係をつくる中で自然と場所に出会うプロセスが大切だと説明。さらに、本格的な事業化の前に、1日利用や小規模な企画などから「小さく試す」ことで、自身の活動に本当に必要な場のあり方を確かめていくアプローチを推奨しました。

一方で、空き家活用には、所有者との関係構築をはじめ、建物の状態や修繕費、近隣との調整、運営体制の確保など、継続するための実践上の重い課題があることにも言及。アートによる地域課題解決といった周囲の期待に応えることだけを目的とせず、それぞれの表現活動の軸を保ちながら、自身に適した関わり方を模索してほしいと呼びかけました。

後半に行われたオープンディスカッションでは、空き物件を所有する参加者から「建物の維持管理への不安がある一方、アーティストと関わることで新たな事業の可能性が広がった」との話が出たほか、映画撮影などを行う参加者からは、「空き家を単なる撮影セットとして使うのではなく、昔そこに住んでいた人の生活の跡を作品に記録した」という活動報告も。これに対し、柳本氏は「消えゆくまちの記憶（生活史）を残す素晴らしいアプローチ」とし、空き家に詰まった歴史をアートの視点で見つめ直すことも、まちの価値を高めるリノベーションの一つの形であると共感を示しました。

アーツカウンシルしずおか 担当：立石沙織氏

「講師である柳本氏の実践やリノベーションまちづくりに関する考え方をもとに、アーティスト等と地域がどのように関わり、互いの可能性を広げていけるのかについて、参加者同士で意見を交わしました。リノベーションまちづくりを初めて知る参加者も多く、アーティスト等にとっても地域で活動する際の選択肢となる可能性を感じました。」